

土器の補修方法からみたコレクションの形成過程

阿部 芳郎

はじめに

下郷コレクションの多くを占める茨城県椎塚貝塚と福田貝塚の土器には、複数の手法による復元方法のあることが確認できる。本コレクションは過去3回にわたる所蔵者の変更があったが、この手法の違いが、所蔵者の移行にともなうものであるのか、個々の資料の扱いの違いによるものなのかは即断できない。しかし、これらのなかのいくつかの資料が文献に引用されていることから、復元のおおよその時期を判定することは可能であり、時系列のなかでコレクションの形成過程を推測する際の手掛かりとなる。ここでは全てにわたっての検討は紙幅の許すことではないが、代表的な事例を示すことによって、コレクションの形成過程について検討を加え今後の活用履歴研究の端緒としたい。

1. 土器の復元方法

土器の形態を復元する際に用いた補修剤は肉眼観察から大別して淡緑色の硬質セメント（補修剤A）、顔料練り込みのセメントまたは粒度の荒い石膏？（補修剤B）によるものと石膏（補修剤C）によるものがあり、補修剤Aでは、形態・文様などを精緻に復元したもの（ア）と部分破片から形態を粗く復元したもの（イ）があり、A-アでは釣り手土器、異形台付土器にほぼ限定され、その数も少ない。

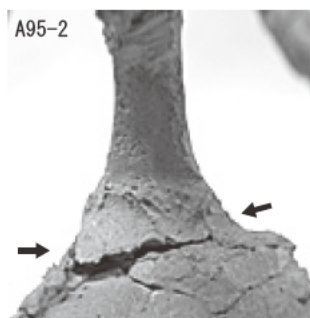
補修剤Bは全体的に暗茶褐色・暗黒色の色調で、表面の粒度が粗い特徴がある。当初から顔料が混ざ込まれている可能性が高いものと判断されたが、破損部分の観察から、補修材Aの上に顔料を塗布したものと判断された。塗布された顔料は一定の厚みをもち、塗彩面に朱色、黄色などの顔料らしい単色粒子が視認できる。また破片上にも一部を塗りつけて、補修部分を不鮮明にする手法が確認できる。顔料に朱を混入している可能性が高く、部分的には朱彩を錯覚させる色調のものがある。また、復元方法として特に異形土器を中心に別個体片を用いる復元が認められ、異形土器への強い収集意欲が感じられる。A-イは補修部分の文様復元などが見られず、作業が中断したか、または形態の復元のみを目的としたものかもしれない。

補修剤Cは粒度が緻密な石膏と思われ、内部は白色。表面は顔料で着彩され、復元の巧妙なものが多い。これらの補修剤の差異は、補修者の差異、補修技術の差異、補修目的の差異などが想定されるが、特に優品には補修剤Cが用いられる場合が多い。補修剤Cの顔料は絵の具を想定させる微粒な顔料であるが、定着剤を塗布、混入しているようで、遊離しにくいようである。

補修剤と顔料については、微量のサンプルで理化学的な分析を実施することにより、含有顔料の成分などを知ることができるかもしれない。顔料混入の技術（顔料粒子の粒形など）はプレパラートを作成し顕微鏡観察をおこなう岩石学的な胎土分析方法で十分に解明が可能であろう。なお、補修剤と彩色の問題は、表面観察によるものであり、詳細を明らかにするためには補修部分の内部構造を観察する必要がある。とくに顔料混入の有無は、補修部の破損断面などからの微量のサンプル採取などで容易に判別できる可能性が高い。

2. 復元個体の観察事例

◆事例1 (A95-2・A142)



吊り手部分と器体は別々に復元され、接合している。またA142のように吊り手部分だけが復元された資料が存在する。これらの部分的な復元は、別個体との接合を経て最終的に1個体に復元する準備段階のものであった可能性もある。

写真1 釣り手土器の修復状況

本例は椎塚貝塚出土の釣り手土器である。釣り手と台部に類似個体破片を用いて全体が復元されているもので3本の釣り手と器体部分に接合痕跡が認められる（写真中の⇒部分）。釣り手と器体のずれは小さく、当初より接合を意図して採寸して別々に製作されたものを、接合したものと考えることができる。残存部分が極めて少ないにもかかわらず、全体を復元している個体は少なく、釣り手形土器に深い愛着をもっていたことを窺わせる。

◆事例2 (A125)

本個体は安行1式の注口土器で全体の一部のみの破片から口縁部から胴部までの復元を行っているものである。3段の帯縄文を描く鉢形の器体に注口部が付けられたものであり、類例は少ない。復元部分は数回にわたる内面の型充てによって行われているが、外面の文様の復元などは行われておらず、修復は途中で終了している。



写真2 注口土器の体部の復元状況

◆注口土器の復元 <注口部・突起>

注口土器の中には注口部を復元したものが多く認められ、中にはそのプロポーシオンに違和感をもつものもある。写真3-Aは堀之内2式の注口土器である。注口部から突起が復元されたものであるが、把手部分の造作は比較的丁寧におこなわれている。

同Bは東北地方の影響を受けた加曽利B3式期の注口土器であるが、注口部は別個体の注口部を利用



A



B



C

写真3 (A～C) 注口土器の復元個体



注口土器の注口部破片だけがまとめられた破片資料。復元用のストックであろうか。

写真3 (D) 注口土器の復元個体

り手土器の部分と底部である。

◆深鉢・鉢形土器の復元

資料中もっとも多い器形は、深鉢と鉢である。これらは全個体数（331 個体）のなか 68 パーセントを占めるが、これらにも修復の痕跡が各所に認められる。

写真4は加曽利B1式の内文浅鉢であるが、この土器の底部は底面よりも幾分立ちあがった部位に浅い溝状の補修痕が認められる（写真4-B）。底部は径のほぼ一致した別個体のものであり、外反する角度が異なるために、接合部分にずれが生じ溝状にくぼみが残されている。接合部にはキメの細かな充填剤か石膏が用いられていると考えられる。さらに破片の端部を削り取り、径を調整している。同様の補修痕は他の深鉢などにも見ることができる。

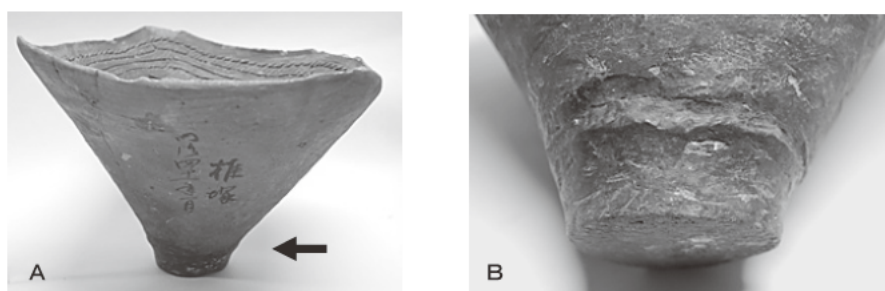


写真4 底部の補修状況

＜事例3＞ 文様の下書きをおこなった個体

本例は補修剤Aを利用して器形を復元した後に、復元部分に文様の下描線を墨書きしたものである。本個体資料は堀之内2式の深鉢形土器で器面に曲線的なモチーフが半截竹管状工具によって描かれるものである。補修剤は器形復元だけでなく、破片の接合部分の間に出来た隙間にも充填されており内面には数回にわたる型充ての跡が観察される。復元作業の途上で中断されている状況を窺わせる。文様は現存する部位を参考にして描かれ、一部に割り付けの合わない部分がそのままに残されている（写真5-B）。



写真5 文様の下書きをおこなった個体

<<補修材Bと塗彩物の関係>>

鉢形土器の修復部の破損面において、観察を実施した。補修材Bを用いて欠損部分を復元した後に厚みのある塗彩をおこなった状態が観察できた（写真6-B）。塗彩物には赤・黄色の顔料粒子が混入されており、部分的に原色の発色が認められる。破損した破片は強度があり、石膏よりも強度が高い。

同様の補修剤と塗装をおこなうものが下郷コレクションの主体を占めている。写真5に示したような補修の中途段階のものと見ると、器形の復元と文様の下書きを行った後にこのような顔料を混和した塗装剤を上塗りしたものである。

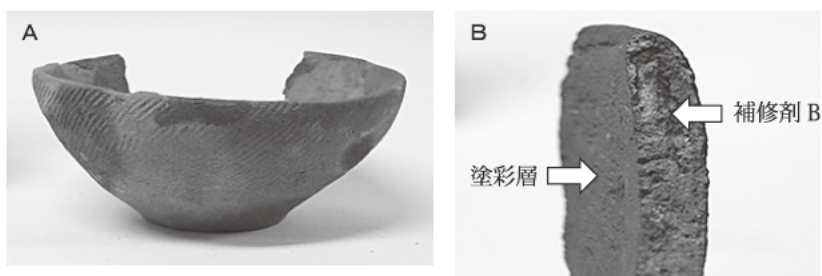


写真6 補修剤と塗装部分の断面

3. 補修方法とコレクションの特性

既にふれたように現存する下郷コレクションは、補修方法において手法や程度の異なる資料群から構成されていることがわかるが、これらが一体いつの時期に行われたのかという具体的な指摘や記述は現時点において見当たらない。

当面のところ、この問題を考える際に手掛かりとできるのは、過去に掲載された資料の復元状況との対比であろう。下郷コレクションがもっとも多数収録されている杉山寿栄男の『日本原始工芸』（1928）には、写真4の内文浅鉢の写真が掲載されている（写真7 A）。

そして、その底部付近には、先述した別個体の底部を接合する手法でおこなわれた補修痕を認めることができ、また写真3-Bの注口土器も注口部の修復が行われている状況が確認できるので、少なくともこうした手法が1928年（昭和3）以前にはすでに行われていたことになる。

一方、おなじ杉山の著書のなかに掲載された個体の中には、これらとは反対に現在の復元状況とは異なる個体もある。例えば第1図左は杉山により「注口土器であったものが、今は注口部を欠損している」〔杉山1928〕と説明されたものであるが、現状では注口部が復元されている。したがって、この注口部の復元は杉山の著作が刊行された以後に行われたことがわかる。復元の方法は、別個体で同系の色調の注口部を接合したものであるが、体部と注口部の接合に用いられた石膏はキメが細かく、先述した注口土器の修復剤Aとは異なる。

さらに杉山の図とその解説によれば「環状土器」として図解されているように、体部は空洞となっ

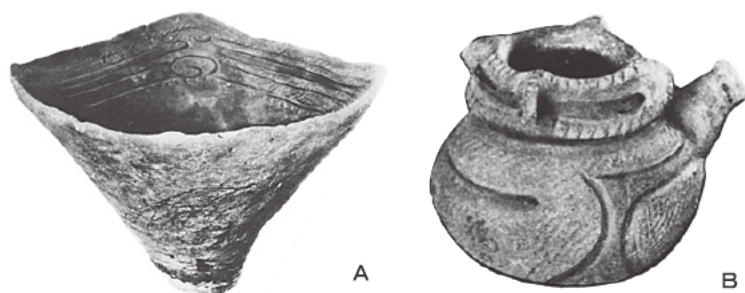
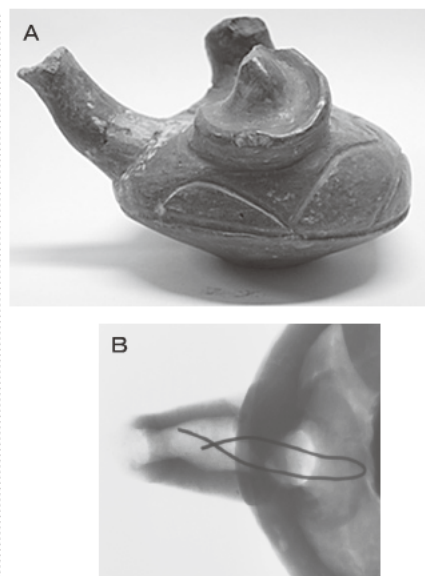


写真7 『原始工芸』に掲載された下郷コレクション

ているが、現存の資料は中実を思わせるほどずっしりと重く、調査の当初は杉山の記述とのあいだに違和感が持たれた。そこでこの土器を大阪歴史博物館において軟X線を透過させて観察したところ、環状の体部の内部には石膏様の充填剤が観察される

とともに、注口部の内部には、この充填剤に差し込まれた針金の存在を確認することができた（第1図B）。

おそらく体部に石膏を充填し、針金を差し込んだ後にこれを支持具として注口部の破片を接合したのであろう。体部の充填剤は大形の注口部とのバランスをとるためのものでもあったようだ。これらの補修方法は他の土器には認められない。

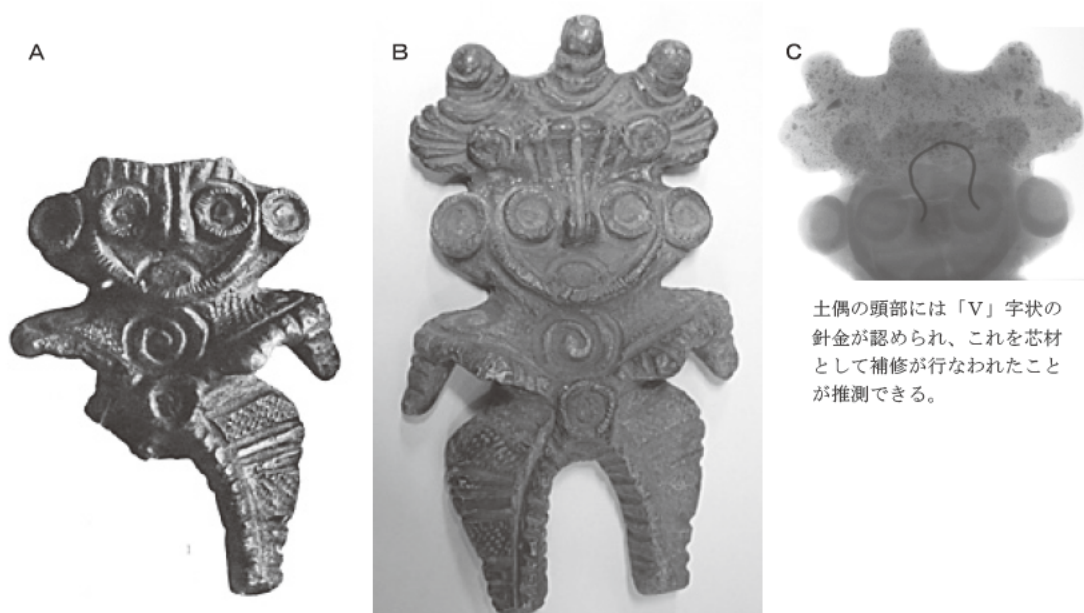


第1図 注口部の復元された甕状注口土器

修復に針金を用いるという手法で、唯一類似性のある資料は千葉県園生貝塚出土とされるミミヅク土偶である（写真8）。この土偶は1908年（明治41）のN. Gマンローの著作^(註1)にも利用されているが（写真8A）、現在では頭部の装飾や腕と足の一部が修復され（同B）、近年の図録類の中には、修復の事実説明を欠いたものもあるほど精巧な造作で復元が行われているが、頭部の内部には針金が埋め込まれていることが軟X線による観察で明らかにされている（同C）。ミミヅク土偶の造形的な復元も同様にキメの細かな白色の石膏によっているものと思われ、着彩と質感も近似している。

4. 下郷コレクションの形成過程と意義

高島多米治の収集資料が下郷共済会の手に移り、下郷コレクションとして長浜の地に收藏されるようになった後に、京都大学がその資料整理に携わったという伝聞があり、この段階で修復が加えられたことがあったという^(註2)。鍾秀館刊行の図録^(註3)の作成のために新たに補修が加えられた可能性も



土偶の頭部には「V」字状の針金が認められ、これを芯材として補修が行われたことが推測できる。

写真8 千葉県園生貝塚のミミヅク土偶の復元状況

高いだろう。小林の著作の中にたびたび下郷コレクションの遺物の図がみられるのは、そうした事実を反映したものと言える。環状注口土器やミミヅク土偶は杉山の著作への掲載以後に新たな修復が行われたことを示すものであり、着彩や復元の造作がより一層精緻である点からみても、修復に携わった人間が異なっていた可能性が高い。以上のように下郷コレクションには、ここに紹介したように、異なる時期に複数の手法によって修復が加えられていたことがわかる。

日本考古学の黎明期にあたる明治時代は、モースの大森貝塚の発掘を端緒とする近代科学としての考古学の潮流が形成されつつある時期であったとされるが、それにも増して古物収集的な活動が盛んな時期でもあった。むしろ彼らの収集欲を満たすために、さまざまな遺跡の発掘が繰り返しおこなわれ、各地に考古コレクションが形成された「大収集時代」であったともいえる。こうした時代に収集された下郷コレクションが今日的にみて重要で興味深い点は、こうした黎明期の考古学において、高島多米治の資料は発掘時の報告が残されているものが多いことと、コレクションが比較的初期からマンローや杉山をはじめとした著作に引用されており、それらの多くが今日に現存していることであろう。

これらの資料が発掘者の高島から下郷伝平の手に渡り、下郷共済会によって手厚く管理されたことは、結果としてこれらの膨大な資料が戦火を免れ、今日に引き継がれることになった大きな要因である。個々の資料の考古学的な研究と共に、これらの資料群の活用履歴を明らかにすることにより、戦前の考古学の歩とともに形成された本コレクションの歴史的意義が明らかにできるであろう。

【註】

- (1) 『PREHISTORIC JAPAN』
- (2) 遺物の基本的な整理として小林行雄が中心となった作業が行われたという。またこの作業に同行した坪井清足氏の所見として、高島は歯科医であったことから復元に歯科用石膏を使い、小林は石膏を用いたという〔加藤俊吾氏教示〕。これが事実であるならば、園生貝塚の土偶や環状注口土器の復元は小林の手によるものである可能性もある。
- (3) 『鍾秀館土器選集』（1927 年）には 18 点の土器が収録されており、収蔵資料の中にその存在を確認できるものがある。

【引用・参考文献】

- 阿部 芳郎ほか 2011 「考古コレクション形成過程における基礎的研究」『駿台史学』第 142 号、駿台史学会、pp85-110
加藤 俊吾・鈴木 正博 2008 「黎明期の考古コレクションと貝塚研究」『季刊考古学』第 105 号、雄山閣
杉山 寿栄男 1928 『日本原始工芸』
下郷共済会 1927 『鍾秀館蔵日本石器時代土器選集』、下郷共済会